

一 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

たいていの人が、散文より韻文、詩歌の方が高級であると思っている。

普通の文章、散文はだれにも書けるが、詩をつくるのは特別の能力が必要であるように思っている。(中略)

文学史をのぞくと、古い時代に残っているのは詩ばかり、韻文ばかりである。

日本文学は平安期にはすぐれた散文作者が生まれていて、ほかの国の文学史と比べると、まことに目ざましい。

一般には『源氏物語』が評価されるが、文章でいえば『枕草子』が傑出してゐる。あれほどみごとな散文が千年も前に書かれたことはおどろくべきことで、ヨーロッパ諸国は詩しか残っていない。しかも、平安期には女性の書き手が何人もいるのだからおどろく。

ヨーロッパで女性が文学作品を書くようになるのは、十八世紀になってからである。男性だって、まっとうな文章を書くようになるのは、やはりたいへんおくられている。

シェイクスピアは、十六世紀から十七世紀にかけてすぐれた作品を書いた。イギリス人は世界一だと考えている。

そのシェイクスピアの書いた戯曲は、無韻詩、ブランク・ヴァースであった。初期の作品には、散文はほとんどない。作者としての腕が上がるにつれて、すこしずつだが、散文があらわれるが、いかにもたどたどしい

文章である。天馬空を往く観のある韻文とは比べものにならない。

おもしろいことに、だんだん散文で上達したらしく、中期から後期にかけて、おもしろい散文のセリフが増える。

シェイクスピアの作品の執筆年代は不明である。推定年代をきめるのに学者たちが苦勞したのは有名な話である。

そういう研究者が、作品の年代順をきめる手がかりとしてとりあげたのが、散文比率であった。

早い時期と思われる作品には、さきにもべたようにほとんど散文があらわれない。出てくるものは稚拙であるといってよいものである。ところが、もっとも後に書かれたと考えられる『あらし』(テンペスト)には相当な量の散文のせりふが見られ、その散文も、初期の散文に比べて、ずっと洗練されているのである。

そういうところから、散文の質量によって創作年代をきめる方法がとられるようになった。せりふで散文が多く、こなれた表現が多いほど後期の作品であるとしたのである。

シェイクスピアは、年とともに散文の腕が上がっていったらしいと考えられた。

言いかえると、シェイクスピアの時代には英詩の技術は高度に洗練されていたのに対して、散文はまだ確立していなかったということになる。シェイクスピアは一五六四年生まれ、一六一六年没、日本で言うところと徳川家康とほぼ同時代の人であったとしてもよい。英語の散文はそれくらいおくら

れていたが、それが問題にされることもなかった。

そこへはっきりした英語散文を確立しないといけないという建議をした人たちがいた。もちろん詩人や文人ではなく、科学の研究者たちである。王立アカデミーのメンバーたちが、理性的表現、明快で論理的表現を求める提言をして世人をおどろかせた。

そういう、事実をのべるのに適した英語が整備されるにつれて、科学などの新しい研究が生まれるようになったのだと言われる。

わが国には、^①これに当たる文体革命はなかったから、いつまでも詩的言語が論理的になるといこともなかった。

このことが、日本人の知的活動に大きな障害になった。なにごとによらず外国模倣、^{もほう}「知識を広く世界に求め」^{こくせ}を国是としてきた近代日本人の思考に大きな影響^{えいきょう}を及ぼしたと思われる。

戦後かなりして、日本語は外国語に訳せない、という批判を受けることになる。

京都大学へ来ていたイギリスの物理学者レゲット博士が、日本物理学会の会報に、「訳せない「だろう」」^②というエッセイを発表、日本の研究者たちをふるえ上がらせた。

^②日本人の物理学者の書く論文に、よく「であろう」という語尾^{ごび}があらわれる。これを訳す英語はない、というのであった。

おどろいた日本の科学者は、物理学だけでなくひろい分野の人たちまでいっせいに「であろう」ということばを使わなくなった。^③なぜ、「であろう」がいけないのか。しっかり考えた人は、ごく少なかったようである。

「である」は客観的記述である。「であろう」は主観的である。厳密な科学論文において主観的記述は適当ではない。そういうのが「であろう」批判である。

これは、認識^{にんしき}の問題である前に、言語の問題である。

「であろう」は主観的であり、「である」は客観的である。科学者が主観的言語を用いているのは適当ではないというのが、レゲット批判である。「であろう」は「である」のヴァリエーション、つまり、ほぼ同じものだというのが、日本人の語感であったのである。

あわてて、ことばだけを改めて解決することではない。

ことばは発生的には主観的である。相手に伝えたいメッセージをはっきりしなくても、はじめのことばは存在しうる。

「うたう」ことばである。

すべて言語は、そのはじめは、「うたう」ことばである。コミュニケーションが意識されると、客観的にならざるを得ない。

「であろう」は「うたう」ことばの系列にあるが、「である」は「へ語る」、^④「へ語る」、^⑤「へ伝える」ことばである。

さきにのべたイギリスの王立協会による言語改革運動は、この「へ語る」、^⑥「論ずる」ことばの必要を要求するものであった。

それがその通りになったわけではなく、現代英語についても、思考^{しこう}を妨^{さまた}げているという指摘^{しこく}が消えているわけではない。

「うたう」のは韻文が適しているし、「へ考え」、^⑦「へ伝える」には散文が必要である。

A が

日本語は、形式的には、散文がよく発達しているようでありながら、その実、へうたうゝ要素をかなり多く残存させている。十分に散文的になっていないのである。

日本語は、散文の浸透しんとうについての関心をあまりはつきりさせない。

日本人の思考が、外国から特異であるように見られるのも、**B**。

散文を書くのは、詩歌をつくるよりも難しいかもしれないということをしつかり認識することが必要である。すくなくとも、詩歌の方が、散文よりも、本質的にすぐれているというのは疑問である。という考えが必要であらう。

美しいもの、美しいことは、へうたうゝことができるが、正しい、おもしろいことは、へうたうゝことばではとらえられにくい。へうたうゝことばで文学は栄えるが、新しいこと、新しいものを生むには、ものごとをあるがままにとらえる客観性の高い言語が必要である。そういう考えが広く認められるようにならないと、活力のある文化は生まれにくい。

さしずめ、日本語散文の確立が求められる。

それは、「**B**」を廃して「**A**」にする、といったことくらいでは解決しない。主観と客観の問題をうまく解決できなければ、日本語の力は失われていくかもしれない。

(外山滋比古『消えるコトバ・消えないコトバ』
とやましげひこ)

問一 —— 線部①が指し示す内容を、文章中のことばを使って、三十文字以内で答えなさい。

問二 —— 線部②とありますが、それはなぜですか。五十文字以内で答えなさい。

問三 —— 線部③とありますが、その理由が書かれた一文をぬき出し、そのはじめの十字を答えなさい。

問四 **A** に入ることばとしてふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 〈語る〉要素
- イ 〈伝える〉要素
- ウ 〈へうたうゝ〉要素
- エ 〈論ずる〉要素
- オ 〈のべる〉要素

問五 **B** に入る文としてふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 〈へうたうゝ〉ことばに強い関心をもっている反面、思考をあらわす散文にはまったく無関心である結果である
- イ 〈へうたうゝ〉ことばと思考をあらわす散文とを混同しており、頭の中でロジックを成立させられないからである

ウ 思考をあらわす散文では物足りなくて、あえて、へうたう〜ことばを用いてロジックをあらわそうとした結果である

エ 思考をあらわす散文が未発達で、半分、へうたう〜ようなことばでロジックをあらわそうとした結果である

オ 思考をあらわす散文が発達し、へうたう〜ようなことばを交えてもロジックをあらわすことができるからである

問六 この文章に書かれていることとして正しいものを、次のア〜オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 世界の多くの国々においては、散文よりも韻文のほうがすぐれているというのが定説になっているが、日本においては、平安時代に散文が興隆こうりゅうしたことが影響えいきょうして、散文に対する評価が高く、散文の質も他国より格段にすぐれている。

イ シェイクスピアの作品では、シェイクスピアの作家としての腕が上がっていくにつれて、韻文も散文も質の高いものになっていくとともに、彼の影響かえを受けた同時代の作家たちの活躍かつやくによって、英国の文学の質が底上げされることにもなった。

ウ 英語の散文は、韻文をもとにして生まれたものであり、シェイクスピアの作品では、韻文が散文に変わっていく過程を見ることができ、シェイクスピアの書く散文はいずれも散文としては完成度が低く、洗練されたものとは言えなかった。

エ 日本語は曖昧あいまいさを避けることができないという特徴とくちょうを持っているため、日本語を用いて散文を書くことは、韻文を書くのと同様以上の難しさがあると考えられ、日本語の散文は韻文よりもすぐれているとされる。

オ ことばは、本質的には主観的なものであることから、散文よりも韻文が先に生じたと考えられるが、コミュニケーションの手段として用いる場合には客観性の高さが求められるため、言語として散文を確立させていく必要がある。

問七 言語（ことば）には、どのような役割があると言えるでしょうか。本文中の筆者の考えに沿って、「韻文」「散文」という言葉を使って、四十字以上六十字以内で説明しなさい。

【解答】

問一 英語の散文を、理性的表現、明快で論理的表現にすること。

(27字)

(英語の散文を、事実をのべるのに適したものととして整備すること。)

(30字)

問二 客観的記述が求められる厳密な科学論文で、主観的記述である「で

あるう」を用いるのは適当ではないから。(49字)

問三 「であるう」は「であ

問四 ウ

問五 エ

問六 オ

問七 韻文のように主観的な感覚を表す役割と、散文のようにものごとを

客観的にとらえて伝えたり、コミュニケーションしたりする役割。

(60字)